

<2004年03月>

「兵は凶器なり」

15年戦争と新聞メディア

- 1926 - 1935 -

五・一五事件で沈黙した新聞

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

五・一五事件への序曲は一九三一年(昭和六)年に相次いで橋本欣五郎ら陸軍若手将校によって引き起こされた「三月事件」、「十月事件」のクーデター未遂事件である。

翌年二月には井上準之助蔵相、三月には団琢磨三井合名会社理事長が血盟団による「一人一殺」のテロにあい殺された。国内のテロの恐怖は一九三一年九月の満州事変、以後の中国侵略に呼応していた。

こうしたクーデター未遂、テロひん発の原因には、世界恐慌の嵐のなかで、農村は疲弊し、特に東北凶作で農民は極度に貧窮、都市の労働者も困窮化していた状況があった。政治は無為無策で政争にあけくれ、疑獄事件が次々に起こり、財閥などの特権階級の腐敗、墮落に国民の怒りは渦巻いていた。これがクーデター、テロを培養し、国民がそれを歓迎する土壌を生んでいった。

1. クーデター未遂、テロ事件が頻発

しかも、三月事件、十月事件とも関係者は軍や政府から厳罰に処せられず、ヤミからヤミへ処理され、さらに暴発のエネルギーが蓄積されていった。このような背景のなかで、犬養内閣は若槻礼次郎内閣の後を継いで一九三一年十二月十三日に誕生した。

このとき犬養首相は七七歳。

老齢にムチ打って登場したが、皇道派のシンボルの荒木貞夫が陸軍大臣に座り、書記官長には満蒙強硬論者で軍部と一脈通じる森恪が座るなど、内閣は前途多難な船出だった。

犬養首相は満州問題を独自に解決しようと強い意欲に燃えていた。

事件前の五月一日にはラジオ契約百万台突破を記念して JOAK(NHK の前身)のマイクを通じて、ファッショ的な政治を強く批判、五月九日の政友会関東大会では軍

部批判をくり返し、満州事変の成功で天をつく勢いの軍部を強く刺激した。

犬養首相は「陸軍の若い連中を三十人位首切ってしまうれば統制は回復できる。自分が参謀総長の了解を得て、陛下に申し上げる」と断固たる決意を周囲にもらしていた。

また、満州問題では独自に解決しようと中国にいる同志たちに使者を派遣したが、この工作が軍部にバレ、荒木陸相は「犬養は怪しからん、満州事変をやめようとしている」と怒り、これらが五・一五事件の遠因になったという(1)。

事件当日の五月十五日は日曜日。東京は五月晴れの上天気であった。折りから来日中の喜劇王チャップリンの歓迎でわいていた。各新聞社ものんびりムードで事件を予想するものは何もなかった。それが一瞬にして暗転した……。

当時、東京朝日の長岡見斉社会部次長は、こう回想する。

「午前十一時ごろ入社したが、全くこの日は何も無い。編集局のあちこちではパチリパチリとヘボ碁戦がはじまっている。午後五時三十五分、突然ではない。何でも無い。電話機のベルが鳴った。

S君がゆっくりと耳に電話機を持っていきながら、月並的な鼻声を出して『はアはアはア』と間伸びした声を出していたが、実にこの時だ。S君は直立硬直して何か発言しようとして『大変だ！』とドモリながら『政友会へ爆弾』とだけ言って消えていった。

チリリン、第二の電話だ。僕が電話機を持った。『牧野内府邸の前の本社専売店ですがね。今軍人が来て爆弾を投げた』とかん走った声だ。……社会部総員に『すぐ出社せよ』の電報が飛ぶ(2)」

犬養首相がテロにあった首相官邸に記者で最初にかけたのは報知新聞の小松東三郎記者であった。

小松記者も急を知らせてきた販売店の情報で官邸に急行した。しかし表玄関で書記官に入ることを制止され、犬養首相には会えなかった。

小松記者は官邸記者クラブの永田クラブへ取って返し、直接電話で事件の第一報を本社に速報した。警視庁玄関前にいた読売新聞の高橋巖記者は拳銃二発を右脚に

受け重傷を負った。

この日の官邸は日曜日とあって閑散としていた。犬養首相は歯医者を呼び治療を受けたあと、和服姿で日本間の安楽椅子にもたれてくつろいでいた。

午後五時半、官邸表門に海軍将校二人が車で乗りつけた。裏門にも陸軍士官学校生四人が現れ面会を求めた。表玄関の二人は押しとどめようとした受付の護衛警官二人に「邪魔をするな」とピストル二発を発射、裏からの四人と合流、犬養首相の日本間へ向かった。

2・犬養首相は「話を聴けばわかる」、海軍将校は問答無用」と撃つ

このあとは - - 。

「犬養首相が日本館食堂にいるのを発見、一人が拳銃の引き金を引いたが、弾丸が装填していなかったため発射しなかった。首相は泰然自若とした態度で『話を聴けばわかることじゃろう』と言いながら男を誘導し日本客間に至った。

この間、首相は三、四回『そんな乱暴をしないで良く話せばわかる』とくり返し、着座すると一同を見回しながら『靴ぐらい脱いだらどうじゃ』と言った。一人が『何か言うことがあれば言へ』と言い、首相が言出さんとして体を前に乗り出した時『問答無用』と他の者が叫び、拳銃二発が首発の頭部に発射された」

犬養首相は撃たれ後も女中に『煙草を一本つけてくれ、それから今射った男を連れてこい。よく話を聞かせるから』と話したりしていたが、約六時間後に息を引きとった。
“憲政の神様”の壮絶な最期であった。

「話せばわかる」は後世に語り継がれた歴史的名言だが、このくだりは新聞には出ていない。わずかに『大阪朝日』第二号外(十六日)に「首相は従容として『なぜ、わしにピストルを向けるのじゃ、わしを射つなら話をつけてから射て...血に狂う彼等をたしなめた』とあるだけだ。

犯人は官邸、警視庁、日本銀行、牧野伸顕内務大臣官邸などを同時に襲撃した。犯行は海軍中尉・古賀清志(当時二六歳)、中村義雄(同)ら海軍青年将校、陸軍士官学校生徒ら十七人、民間は愛郷塾頭、橘孝三郎、後藤圀彦らで引き起こされたものであった。

古賀らはこのクーデターで戒厳令を出し、荒木陸相を首班にかついで軍政をしく計画をしていたが、事件後に、憲兵隊に一斉に自首した。橋孝三郎ら愛郷塾のメンバーもテロに呼応し田端変電所、鬼怒川変電所などを破壊する予定だったが、これまた計画がズサンで未遂に終わった。

3・犬養首相暗殺で政党内閣は終焉

このクーデター計画も幼稚で荒唐無稽であったが、テロの影響は甚大であった。

「直接行動による犬養首相の暗殺のため政党内閣は終焉を告げた。恐怖手段によって軍の勢力に反対の立場にある政党及び政党政治家に一撃を加え、内外に対する国政の防波堤を切断した。もはや軍部の行動に対して、正面からこれをさえぎるものはなくなった(4)」

と満州事変当時、駐支公使であった重光葵は痛憤をこめて書いている。

五・十五事件は日本の政治史上の分岐点になり、政党政治の息の根を止めたばかりではなかった。

「話せばわかる」という犬養首相を「問答無用」と撃ち倒したテロは言論の上に暴力が君臨する“恐怖時代”の幕開けとなった。

言論界は恐怖し、沈黙した。言論の息の根をも止めたのである。

『朝日』『毎日』など新聞全体がきびしい言論統制下にあったとはいえ、満州事変での排外熱、軍国熱を熱狂的にあおり、政府の満蒙政策の弱腰を責め、軍部の独走を支持した結果のあまりにも重いツケが早くもあらわれたのである。

この事件を契機に満州事変以降、ますます鼻息の荒くなった軍部の横暴はいつそうエスカレートした。「非常時」が声高に叫ばれるようになり、言論にも、“問答無用”の圧力を加えるようになった。

4・言論にも、“問答無用”の圧力

事件当初、小磯国昭陸軍次官は「東京に戒厳令を布き、事件に関する報道を一切禁止する」よう政府に迫った。

しかし、言論取り締まりの総本山・内務省は「すでに号外も出ておりかえって社会不安

を増大させる」と否定した。

が、内務省は新聞紙法その他で、事件発生と同時に次の記事差し止め通報を全国の警察に指示、事件の全容の報道をストップした。

一、犬養首相狙撃の不穏事件に関し事実を捏造誇張し、人心を不安ならしむるが如き記事は掲載しないよう厳重注意。

二、不穏犯人の撒布したる「日本国民に撤す」と称する「ピラ」は禁止せられる。内容を掲載したる新聞紙は差押えよ。

この結果、『朝日』『毎日』『読売』『報知』の号外など八十九件が禁止、百四十二件が注意処分となった。

翌十六日には「犯人の身分、氏名などの素性、事件が軍部に関係ありとし、国軍の基礎に影響あるが如き事項」「原因並びに今後再び起こることありと予見するが如き事項」が掲載不可となった。

ただし、従来よりは事件の掲載がかなり自由だったと、『東京朝日』十七日社説は指摘している。

ペンが一番その責任を果たすべきなのがこのような時であろう。

五・一五事件での各社の論説はその社の言論機関としての歴史的評価をみせてくれる。

軍部ファッショを真正面から痛烈に批判したもの、問題の本質をスリ替え、政党政治の墮落に目を向けたり、逆にテロの動機の純粋さをたたえ讃美したもの、などさまざまあった。だが大部分は、言論の勇気が最も必要とされるこの時に、恐れをなし、沈黙し、あるいは追従してしまったのである。

5・言論の勇気が最も必要とされる時に、メディアは恐れをなし、沈黙した

そんななかで言論の本領を發揮した数少ない一つに『大阪朝日』がある。

『大阪朝日』は十六日「帝都大不穏事件、憂うべき現下の世相」と題して異例の二段組みの社説を掲げてきびしく弾劾した。

「言語道断、その乱暴狂態はわが固有の道德律に照しても、また軍律に照しても、立憲治下における極重悪行為と断じなければならぬ。海陸軍の軍籍に身を置くものが政治上の目的をもって暴力団体的の直接行動に出ずるは、いずれの点より觀ても弁護の余地なき言語道断の振舞いといわねばならぬ。」

たとえその動機において、或は一図に今の世を慨し今の政党に愛想をつかし、今の財閥に憤ったからだといっても、立憲政治の今日、これを革新すべきの途は合法的に存在する。

短慮にも暴力革命を起すべく直接行動に出ずることはその手段において断じて許すべきでない」

その翌十七日説「対策を急げ、総裁の後任は公選を可とす」も記事全体は四段にのぼる長い社説で論じている。

「白昼団体的の直接行動にいでた帝都不穩事件の突発が全国の人心に与えた衝撃はここに言論をもって尽せぬものがある。

国家多難の際、恐怖時代を現出せしめんとする最も憎むべき所業である」と批判したあと、

「要するに墮落せる現在の既成政党そのものに対して国民が全く信頼し得ないとは勿論であるが、しかし、議会政治と政党の形式以外に暴力その他の非法行動によって獲得さるべき政治に対して、国民多数がそれより以上の信頼を払い得ないことは言

ま
を疑たないのである」。

以後、『大阪朝日』の五・一五事件に関する社説はない。

しかし、この社説をみると事件の張本人である軍部の独断、暴走をきびしく弾劾しており迫力がある。当時、『大阪朝日』『東京朝日』と『東京日日』『大阪毎日』は経営母体は共に一緒ながら社説は異なっており、別々のものが載っていた。

『東京朝日』をみると、『大阪朝日』に比べずっと後退した内容となっている。犯行の動機の純粹さに言及しており、中途半端な論旨となっている。

6・・・腰砕けの毎日社説

十七日「速かに帝都の不安を除け」では「政党政治の弊害の近年特に甚だしいのは既に定評の存するところで、従って青年人士が一面忠良の国民として何等かの非常手段を用いてもこれを打破せんことを考える、その純情のほとばしるところ遂にかくの如き直接行動に及び立憲政治の根本まで破壊することがあっては、いわゆる玉石共にやくもの、結果の期待と相反するはもちろん断じて許すことを得ないのである」

この際、政党政治の腐敗や動機の純粋さをもち出すことは、テロの首謀者たちを弁護することになり、ひいてはテロの容認にもなるが、ケンカ両成敗的な腰ぐだけの説となつている。『東京日日』も同じ論旨であった。

『東京日日』は十六日社説「帝都恐怖に襲はる」でこう論じている。

「われ等は衷心よりかかる事件の起こつたことを悲しまねばならぬ。なるほどわが国の現状に対して不満を抱かぬものは少ないであろう。

ことに政界の事相については心ある者そして目をおおわしめる報道が多い。(中略)もし、テロリズムを以て社会全般の廓清が短時間に出来ると考えれば、それは余りに単純である。

動機の純なるものはなおこれを忍ぶべしとするも、一度殺伐の風の許されんか、世は凶悪なる徒輩の跳梁に委せられ、治安も秩序もなく、その社会自体の破滅とならざるを得ない。われ等は、重ね重ね今回の事件の発生を国家に取り不幸とするものである」

翌十七日「不祥事と政局」では「国内に不安の事象の生ずるは政治中心に力と威信が欠けているためである。われ等は政治の本体を強固にしなければならぬ。罪は法を以てこれに臨む。けれども罪の人を生ぜる事情は一片の法を以ては如何ともすることを得ない。国民の深思すべきはこの点ではないか」

ことに「不祥事と政局」では政党政治のだらしなさが原因と犯人の肩をもつたような内容である。これでは荒木陸相の次のようなコメントと大差はない。『読売』も同じような論説を掲げた。

7・読売はテロよりも政治家を批判

『読売』の十七日社説「犬養首相の逝去を悼む、不祥事に脅かされた帝都」は「今日、我国の現状を見るに、失業者は都会に溢れ地方に満ちている。

何といっても社会不安は生活不安がその本源である。この根本を^{ただ}匡まない限り、凶事の絶滅は期し得ない。即ち今回の事件の如きは古井戸に溜れるメタンガスの爆発の如きもので、これを不用意に見逃していた政治家の罪でもあるのだ。

荒木陸相は「本件に参加したものは少年期からようやく青年期に入ったような若いものばかりである。これらの純真なる青年がかくのごとき挙措に出た心情について考えれば、涙なきを得ない。

名誉のためとか、私欲のためとか、売国的行為ではない。真にこれが皇国のためになると信じてやったことである。ゆえに本件を処理する上に、単に小乗的観念をもって事務的に片づけるようなことをしてはならない」と各紙に述べたが、これに似ていることか。

こうした無責任に若手将校を甘やかした態度が下剋上の気風を助長し、暴走に拍車をかけたのだが、『東京日日』『読売』などはテロよりも政治の腐敗へよりきびしい目を向けていたのである。

8・中途半端な社説の中で、唯一、正面から軍部ファッショを批判した西日本新聞

このほか、『都新聞』が「一大不祥事」、『報知』が、「首相遭難と政局の不安」、『国民』が「犬養首相遭難」、『時事新報』が「不安社会と後継内閣」、『中外新報』（現『日本経済新聞』）が「人心の安定が急務」などの論説をかかげたが、いずれも大同小異で徹底したファッショ排撃の内容ではなく、中途半端なもので精彩を欠いた。

こうしたなかで、唯一、真正面から言論のたたかいを挑んだのは、全国紙や中央紙ではなく、九州の『福岡日日新聞』（現『西日本新聞』）の菊竹六鼓唯一人であった。わが国の戦前の言論がいかに貧困であったか。

菊竹六鼓の勇気とともに、他の新聞の言論が一番必要とされる時のふがいなさをみせつけられる。「言いたいことを言うのはたやすい。言うべきことをいうには勇気がいる。生命がけの勇気がいる」という一つの例証がここにある。（つづく）

(参考・引用文献)

- (1) 『一老政治家の回想』 古島一雄 中公文庫 1975年八月 241, 249P
- (2) 『文史朗文集』「五・一五当日の編集室」 鈴木文史朗 講談社1952年刊295 - 302P

- (3) 『現代史資料 国家主義運動 右翼思想犯の総合的研究』 司法省刑事局
みすず書房 1963年刊 100P
- (4) 『昭和の動乱』 重光葵 原書房 1976年刊 125P